中世日本文学と時間意識

永藤 靖

未来社刊

中世日本文学と時間意識

永藤 靖

未来社刊

永藤 靖（ながふじ やすし）
1941年栃木県生まれ。
明治大学文学部教授
『古代日本文学と時間意識』（1979，未来社）
『時間の思想』（1979，教育社）

中世日本文学と時間意識
発行――一九八四年一一月一〇日　第一刷発行
定価――一八〇〇円
著者©――永藤　靖
発行者――西谷能雄
発行所――株式会社　未来社
東京都文京区小石川三―七
振替（東京）七―八七三八五
電話・（03）―814―5521～4
本文印刷――ひろせ印刷
装本印刷――形成社
装幀――入野正男
製本――今泉誠文社

はしがき

昭和五四年わたくしは古代日本文学に現われた時間意識について考察し、これを『古代日本文学と時間意識』として上梓した。本書はいわばその続篇として書かれたもので、あれから五年の歳月を経たことになる。

当初のわたくしの目論見では、記紀、万葉から源氏に至る、上代・中古の文学作品に現われた具体的な表現世界を通して、そこに古代人の時間意識をさぐっていく方法は、中世と呼ばれる次の時代においても有効であると考えていた。しかし中世文学の作品を読みすすめているうちに、この計画は、まったくの夢想にすぎないことを思いしらされて挫折した。

確かに、万葉においても、古今においてもあるいは源氏においても、そこにはその時代と強烈な個性によって表現に達した独自な時間意識が具体的に形象化されていたことは事実であるけれども、しかしひるがえってみれば、そこにはなお共通な古代的な時間の様相が浮びあがっ

てくる。

たとえば日本文学を特徴づけている豊かな季節表現を例にとっていえば、明らかに万葉に現われたそれと、古代律令制と暦法によって規制された古今の季節感との間には大きなへだたりがあることがわかる。しかしそれでもなお万葉人と古今人の間には共通な時間意識があった。それは一口にいってしまえば、時間というものが意識されるにしろされないにしろ、決して切れることはないという確固たる観念であった。言いかえれば時間が流れ去るものであると意識されたとしても、それは切断されるものではないという意識である。時間がひとつの連続としてイメージされるかぎり、そこには非連続という考え方は入ってはこない。そしてまた時間の連続性が信じられている限り、そこには偶然性という観念は入ってはこない。時間の流れが連続する必然的な流れとして意識されていたことは、古代日本文学のもっとも大きな共通項だといってさしつかえない。

中世日本文学をこの観点から眺めると、中世という新しい時代そのものが、古代的な世界の単なる延長線上にないということに気付かせられる。すなわち、古代的なものの崩壊、価値観の転倒が実は中世の文学作品の表現の核であるということである。古代から中世へという移り変りをひとつの切れ目、慈円の『愚管抄』の言葉をかりれば「コノ世ノカハリノ継目」と意識するところで中世の文学作品は始っているといってよい。したがって、作品に描かれている人

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

生観も死生観も季節感も古代の文学作品のそれのように連続した時間意識においてとらえることはできない。そこでは時間は流れるという必然性を持ちながら、同時に偶然性を含んだ非連続なものとして意識されるのである。必然性と偶然性があざなえる縄のように鋭く意識されながら、それが作品を血肉化している。

以上のような視点から、古代的な世界の崩壊を描いた『平家物語』に始まり、近世的な世界の出現、『閑吟集』までの時代をあつかった。

なおⅠの「中世日本文学と時間意識」は明治大学文学部紀要「文芸研究」五〇号・五一号（昭和五八年十月、昭和五九年三月）に分載されたものである。Ⅱの「古代から中世へ――熊野三山と水における再生の原理――」は同じく「文芸研究」四七号（昭和五七年三月）に「熊野三山と物語文学の祖型」の題で発表したものである。これは明治大学人文科学研究所より研究費を受けて成ったもので、時間意識の問題とは直接かかわりを持つものではないが、古代的なものがいかにして中世の世界の中に流れ込んでいるかを考察したという点で併録した。

最後に私事で恐縮であるが、前の著作が上梓されてから現在までの五年間は、わたくしにとっては、普通の意味での五年間ではなかった。この間にわたくしは前著を世に送り出して下さった恩師唐木順三先生の急逝に出会った。死の間近い病床に、週に何度かおとずれては、中世

文学と時間の問題についてさまざまな御教示を得たことは、わたくしにとってかけがえのない豊饒な経験であった。先生を失なってから気をとりなおして机に向っている時にも、いつもの先生の御声が耳許でなつかしくきこえてくるのはしばしばだった。おそらく先生がいらっしゃらなかったらこの本を書くことは、わたくしにとっては不可能であった。今ようやくこの拙い論稿によって、あの時にかわした先生との約束を果しえたことをわたくしの喜びとしたいと思う。そういう意味でこの本を先生の墓前に捧げたいと思う。

また本書の出版に際しては、未来社編集部の西谷能英氏にひとかたならぬお世話になった。末筆ながら、感謝をこめてお礼を申し上げる。

昭和五九年六月八日　対島・厳原にて

永藤　靖

中世日本文学と時間意識

目次

はしがき　1

I　中世日本文学と時間意識　11

一　平家物語の世界　13

1　宿世観から運命観へ　13

2　偶然性と必然性　26

3　さまざまな生のかたち　41

二　新古今的世界と構築された時間　51

1　本歌取りの方法　51

2　歌における間と偶然性　65

3　開かれた世界と閉じられた世界　75

三　連歌と時間意識――飛花落葉の世界――　92

四　無常観と時間意識　111

1　住居論――仮寝の庵――　111

2　自然のうつろい　131

五　玉葉集と風雅集――光と影の世界――　138

六　能の花と幽玄――肉体的時間と芸術的時間――

1 花の永遠性 148
2 序破急の時間意識 159
七 中世文学と道の発見 170
1 道の二つの側面 170
2 ミチからドウへ 176
3 ミチをささえたもの 185
八 中世から近世へ——時間意識の世俗化—— 192
注

Ⅱ 古代から中世へ——熊野三山と水における再生の原理

一 黄泉国の女神 207
二 山と海のまじわり 215
三 水の神話的意味 220
四 再生の女神——照手姫と五衰殿—— 233
五 二重幻想としてのユートピア 242
注

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

中世日本文学と時間意識

I

中世日本文学と時間意識

一　平家物語の世界

1　宿世観から運命観へ

『平家物語』の中の「運命」という語に注目し、深い考察を加えたのは、石母田正氏であった。氏はその著作『平家物語』で、「運命について」という一章をもうけ、たとえばその冒頭で「平家物語ほど運命という問題をとりあげた古典も少いだろう。この物語を読んだ人は、運命、運、あるいは天運、宿運というような言葉がくりかえしでてくることに気がついたにちがいない」と述べている。[1] 確かに、これらの語は、一時代前の、たとえば王朝の女流文学等にはまったくといってよいほど使用されなかった新しい観念を意味する言葉であった。

ちなみに『平家物語』中に現われるこれらの語の頻度を調べてみると、「運命」が一七例、「運」二四例、「宿運」三例という多数に達する。この数字は同じ軍記物語の先行作品である

『保元物語』や『平治物語』と比較しても異例なことといわなくてはならない。『保元物語』には「宿運」が二例、他に「宿業」が二例、『平治物語』に至っては「宿業」が一例で、共に「運命」や「運」の語は皆無である。この二作に対して『平家物語』が長編であることを考慮したとしても、なお、平家がこの語をいかに重視しているか、あるいは平家的世界が、この語の意味するところにおいて成立しているかを如実に物語っていよう。おそらくその一つには、物語の素材となった保元の乱や、平治の乱が人々に与えた社会的な現実の重みと、平氏、源氏の、社会の動乱と交替を経験しなければならなかった現実的な重みの相異が、これらの語の頻度となって現われたのだとも見ることができる。

そしてまた一歩推測を進めれば、ひと時代前の王朝女流文学においてこれらの語がほとんど使用されなかったのは、この「運命」や「運」の語を必要とする現実が彼女たちの間にまだなかったのだということもできる。(2)

しかしながら、王朝の女流文学作品の中には、この語とたいへんよく似た語で「宿世」という言葉がしばしば出てくるのも事実である。たとえば『源氏物語』等は、ある意味では「宿世の文学」と規定しても過言ではないほど、この語が多数用いられているし、また筋の運び、人人の生誕や死、出世、出会い、人生のことごとくが「宿世」の一語において語られ、彩られているのである。その用例の数は実に、一一七を数える。そういう意味では『源氏物語』の「宿

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.